



「本巢郡」に属した 奈良時代

奈良時代とは、平城京(奈良)に都が置かれた710年から794年までの85年間を言う。

政治は大化の改新(645)後の「国司(こくじ)郡司(ぐんじ)」制度が続けられ、中央から派遣された「国司」と、地方の豪族が任命されることが多かった「郡司」とによって統治されていた。

地方組織も再編され木知原は「本巢国から本巢郡」に属することになった。その記録が「倭名類聚抄」と「新撰美濃志」に見られる。

根尾松田地区神社の仏師や塗師は全て大野郡(越前)の職人であった。後に南朝に与したのうなずける。明治末までは黒津小鹿以北は衣食住ともに越前の文化圏で鯖寿司文化もその一つなのでしょう。

「倭名類聚抄」には八郷について (ワミョウルイジュショウ≒平安時代漢和辞典)

「毛止須郡(モトスグン)には美濃郷・鹿立郷・遠市郷・安堵郷・穂積郷・物部郷・舟木郷・栗田郷」の八郷があった。

「新撰美濃志」には本巢郡の四至について (シンセンミノシ≒江戸末期地誌)

「本巢郡は南より北へ細長き地也、東は厚見・方県・山県郡、南は安八、西はすへて大野郡、北は越前国大野郡に至れり」。

木知原がどの郷に属していたかについては両資料とも不明であるが「北限が越前と境をなしている」とあるから八郷の一つに属していたことは確かである。

「毛止須郡」とは何でもありの当て字でおもしろいと思いませんか?



木知原のくらしは「貧窮問答歌」並みか?

木知原は都に近く早くから「租庸調」をはじめとする諸税を納めていたことは前号で記したが、奈良時代になると地方の為政者への税も一段と重くなった。

中でも雑徭(ぞうよう)と言って年に60日以上も労役に駆り出されたり新しく兵役負担が増えたりしてくらしは一層厳しくなったようである。当時の暮らしの様子を画いている「貧窮問答歌」の中から皆さんご存じの歌ですが紹介しましょう。

「貧窮問答歌」とは、

奈良時代: 農民の貧窮実情や世の非道を山上憶良(自画像)と農民との問答形式で画いた和歌集(721年)(憶良: 奈良時代の官人・歌人)

問: 竈には火気吹きたてず 飯には蜘蛛の巣かきて 飯炊く・
此の時は 如何にしつつか 汝が世は渡る

前半で「ご飯炊くことさえ忘れてしまった」と農民の苦しさを語り最後に「どうやってあなたはくもしていくのですか」と問うている

答: 世間の道 世間を憂しと恥しと愚へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば

答えで「耐え難いが鳥ではないので飛んで行ってしまうこともできない」と胸の内を詠んでいる。

木知原村のくらしは“問答歌程では…と”ひいき目にみても私たちの想像を超えていたと思う。

大仏のすごさには驚くがその建立に先祖が納税や労役を担っていたことは余り頭をよぎることはない。歴史は庶民の立場から振り返ることが大切と言われるがなかなか難しい!



この頃から“税は重く・命は軽し”の暮らしが江戸時代まで1000年余も続くのである。

都に近い木知原もこの世情から逃れることが出来ず、生きるに精いっぱいであったことは容易に推測できる。楽しみの一つである濁り酒が口にできるのも鎌倉時代と言うからまだまだ先…

なかなか資料が見つからず深堀できませんがもう少し続けてみたいので宜しく。